

SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス No.159

2000.4・5・6

■わが大学		平成12年度事務連絡会報告	／8
明海大学 学長 高倉 翔	／2	教育プログラム委員会報告	／9
■故 名誉館長飯田宗一郎氏をしのぶ会のご案内	／3	平成11年度収支決算書	／9
■対談「新しい大学セミナー・ハウス」		寄贈図書	／9
理事長：中嶋嶺雄 館長：絹川正吉	／3・4・5・6	■新入生合宿に参加して	／10
■教育プログラム報告		■平成12年新入生オリエンテーション合宿実施状況	／10
第183回大学共同セミナー	／7	■利用状況	／11・12
第1回「世界とアメリカ」セミナー	／7	■主催プログラム開催予告	／12
■法人ニュース		■館長室から	／12
理事会・評議会報告	／8		

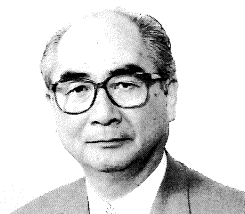


Plain living and high thinking

財団法人 大学セミナー・ハウス
 INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE, INC.
 ホームページ <http://www.mesh.ne.jp/iush/>

明海大学

学長 高倉 翔



「新・新制大学」への改革を

筑波大学に勤務していた一九八八年に大学セミナー・ハウスの「大学教員懇談会」企画委員を委嘱され、一九九六年に明海大学へ移ってからも、館長の故・岡宏子先生から、何度も「原級出席を命ず」として卒業を認めていただけず、今日に至りました。従いまして、この委員会では、ダントツの永年勤続となってしまい、その結果、「わが大学」の一文を書く羽目になりました。

最近、「旧制大学」の《遺産》は勿論のこと、五〇年程前の終戦直後に発足した「新制大学」の《足跡》をも清算して、新しい時代に即応し、大学審「答申」の言葉を借りれば、「競争的環境の中で個性の輝く」大学を創造しようとする動向を示すため、「新・新制大学」という用語が登場しております。

他方、十八歳人口の激減にもかかわらず、大学の新增設も止まるところがない状況であり、いわば「新設大学」に対して、「新・新設大学」ともいべき大学が多く登場しております。

明海大学は、一九七〇年、多くの方々の記憶に鮮明な「大阪万博」開催の年に、埼玉県坂戸市に城西歯科大学として創設されました。あの「大学紛争」直後といった方が身近に感ずる方々も少なくないと思います。ミレニアムの今年、創立三十周年を迎えました。

典型的な単科の「新設大学」といえる城西歯科大学は、その後、一九八八年、千葉県浦安市に外国語・経済の二学部を設置し、大学名を明海大学に変更しました。「新設大学」の口惜しさといえますが、しばしば、「明海大学はどこにありますか」と聞かれます。その都度、「デイズニールランドの隣です」と答えることにしております。もっとも、これは浦安キャンパスのことです。坂戸キャンパスには歯学部と付属病院などがあります。

明海大学というと、類似した大学名が多いよう

です。かつして真似をした訳ではなく、東京湾に面した浦安キャンパスの町名が「明海」なのです。ただし、町名の方は「あけみ」と読みますが。

浦安キャンパスには、続いて、一九九二年に不動産学部が設置され、現在、四学部、八千人近い学生を擁する大学になりました。この不動産学部は、まさしく「個性輝く」に相当すると思えますが、今日でも「本邦唯一」の学部でございます。

なお、浦安キャンパスには「別科日本語研修課程」が設置されており、国際交流の一端を担っております。

以上、「わが大学」の歴史を概略的に述べてきました。明海大学は、文字通り「新設大学」であり、時間的にも社会的にも「伝統」の積み重ねが少ないのはやむをえません。それだけに、時には呪縛ともなる「伝統」とらわれず、「競争的環境の中で」自由自在に、かつ、迅速に「新・新制大学」への大胆な改革が、それも、明らかに進行している「画一的個性化」現象とは無縁の舵取ができます。

私立大学の場合、建学の精神が重要な意義をもっております。歯科学の研究に造詣が深く、国際的な感覚に優れた実業家でもある故・宮田慶三郎先生によって創設された明海大学は、「広く国際未来社会で活躍し得る有為な人材の育成」を建学の精神としております。従って、未来社会を見据えつつ、この精神の《具現化》のための努力が求められております。

具体的には、全学的に、「国際交流の推進」と「生涯学習社会への対応」を柱に、思い切った改革を断行しております。現在、海外の二〇大学と交流協定を結び、海外に二つの研究所を設立したほか、教員の研究交流や学生の長期・短期の留学が活発で、大学による経済的支援も行っております。外国人留学生の受け入れにも積極的で、別科や特別聴講学生を加えると、四五〇人から五〇〇人に達します。この数字は、全国の私立大学中、第四位になります。

学部レベルでの昼夜開講制の導入や高度職業人の育成を意図した大学院の質的充実、特に歯学部では、卒業直後者に対する卒業後教育施設（PDI）や現職歯科医を対象とする生涯教育センター（CC）の拡充整備などに力を注いでおります。

現在、日本の大学は、「大学」という名称の下で、さまざまな役割・機能を果たしております。私は、「大学は教育機関であり、研究は重要な機能の一つ」と考え、「教育重視」を訴えております。本年四月にFDセンターも発足させました。学生による授業評価への不可避的な反発に対しては、「評価する者は評価されるという、明々白々な社会常識」を訴えております。「社会人学生への適切な対応の必要性」も強調しております。

「新・新制大学」への改革には王道がないかも知れません。明海大学では、最適な方策を迅速に決定し、それを着実に実行に移すことを目指して、日常的な努力を継続しております。



故 名誉館長 飯田宗一郎氏をしのぶ会のご案内

去る1月26日、大学セミナー・ハウス名誉館長飯田宗一郎氏が逝去されました。
当ハウスでは、日ごろご厚誼を賜りました皆様方とともに「故名誉館長飯田宗一郎氏をしのぶ会」を下記の通り執り行い、氏を偲ぶためのひとときを持ちたくご案内申し上げます。

日時・場所 平成12年10月1日(日) 13:30~16:30
大学セミナー・ハウス
受付開始 (於本館フロント) 12:30
しのぶ会 (於講堂) 13:30~15:00
弔辞
思い出を語る
記念の集い——茶話会(於本館食堂) 15:30~16:30
お問合せ先 大学セミナー・ハウス 企画・経理課

TEL: 0426-76-8532 (直)
0426-76-8511 (代)

理事長：中嶋 嶺雄 (東京外国語大学学長)
館長：絹川 正吉 (国際基督教大学学長)

対 談

新しい 大学セミナー・ハウスを語る

(平成12年8月9日)

司会 大学セミナー・ハウスでは、今年6月1日、理事長に東京外国語大学学長の中嶋嶺雄先生を、館長に国際基督教大学学長の絹川正吉先生をお迎えしました。そこで今号の『ニュース』では、お二人のご紹介を兼ねて、大学セミナー・ハウスについての対談をお載せすることに致しました。まず、大学セミナー・ハウスとの関わりについてお話しいただけますでしょうか。

中嶋 現在、国立大学の学長ですので、その立場からも可能な限り経営や管理の方面で、大学セミナー・ハウスの活性化のお役に立ちたいと思っております。私はこれまでいろいろな形で大学セミナー・ハウスのお手伝いをさせていただきました。ちょうど大学紛争があつて大学教育がまだ非常に深刻な状況の頃に留学生と一緒に討論する国際学生セミナーが始まり、その第2回からずっとこのセミナーに講師や委員としてかわり、10年ほどは国際プログラム委員長を務めていたことになりました。またその後は運営委員や理事、常務理事といったことでも縁が続いてまいりました。このたび私が理事長をお引き受けするにあたりましては、飯田宗一郎さんが創られたこの大学セミナー・ハウスを、ただ引き継ぐだけでなく、次の世紀に新しく発展させていくことが必要だということを持ちしております。

司会 絹川先生の大学セミナー・ハウスとの関係はいかがですか。

絹川 私は大学セミナー・ハウスには、利用者の立場でご縁がありました。積極的に関わるようになったのは、大学教員懇談会企画委員会の委員になったところからです。その委員の時代に、大学教員懇談会の歴史をまとめた『大学は変わる』を佐藤保氏(お茶の水女子大学現学長)、飯田能子氏(当時大学セミナー・ハウス企画室主任)と共に編集しました。その後、大学教員懇談会の中でFD (Faculty Development) を始めようという話が出てそれに関わり、そしてFDプログラム委員会(大学教員研修プログラム委員会)が大学教員懇談会から分離・独立した際にFDプログラム委員会の方に加わって、この数年間はその委員長をしてきました。このFDが時宜を得て、大学セミナー・ハウスの特徴的な活動になったということもあり、前々館長の岡宏子先生のご命令で常務理事になったわけですが、私もその関わりと言え、創立者の飯田宗一郎さんです。私は、飯田さんの原点はICU(国際基督教大学)だと思

います。『大学を開く』(大学セミナー・ハウス創設史)の中にも出てきますが、飯田さんは当時の大学の状況に対して非常に危機感を持っておられ、これでは日本の大学教育はだめだということから大学セミナー・ハウスを発想するわけです。そういう今の日本の大学のあり方に対する批判の原点には、日本の大学史の中で非常にユニークな出発をしたICUがあつたと思うのです。おそらく、飯田さんのICUにおつた経験がこういう批判的視点に立つことに役立ったと思います。飯田さんはICUのスタッフでしたから、飯田さんご自身を存じ上げたのは、私がICUに勤めた一九五五年からです。飯田さんとは45年もお付き合いがあつたということになります。

創立者の業績

司会 今年1月26日に亡くなった創立者の飯田名誉館長について、大学セミナー・ハウスの歴史的事柄も交えながらお話しいただきたいのです。

中嶋 私は飯田さんを存じ上げて30年程になります。飯田さんは非常に個性的で、人間として大いに尊敬すべき人でしたが、それだけにまた唯我独尊ともわがままとも言える面があり、逆にそういうところがあつたからこそ、これだけの施設を立ち上げることができたのではないのでしょうか。クエーカー教徒で、奉仕の気持があつて、おそらく絹川先生がおっしゃったようにICUという、キリスト教理念の私学の影響もあつたのではないかと。

絹川 同志社を卒業され、クエーカー教徒であつたことが、大学セミナー・ハウスを発想することに影響していると思います。

「セミナー・ハウス」という言葉は飯田さんの創作です。今では「セミナー・ハウス」は普通名詞になっていますが、それまでは「セミナー・ハウス」という言葉はなかつたのです。そして、ただの「セミナー・ハウス」では心もとないし、「学生セミナー・ハウス」では事柄が限定されすぎるといふので、「大学セミナー・ハウス」ということにしました。それでも目的とする性格を表現し尽くせないのを、英語名で補完して、INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSEとしました。この英語名のアイディアをICU英語教授の清水護さんからいただいたのだそうです。今は単位互換など大学間の交流が盛んですが、当時はそのような発想が全くなく、そういう時にインターユニヴァーシティということを発想したのは飯田さんの大



▲中嶋嶺雄理事長

きな功績です。また大学セミナー・ハウス設立には、教員と学生とのコミュニケーション、交わりや人格的な影響とすることを非常に重く考えて、それが実現していない日本の大学教育に対する厳しい批判が発想の原点になっていました。

中嶋 日本は社会全体の悪い点ですが、一度その学部や学科に入ってしまうと、卒業後もずっと自分の経歴になって、縦社会の中で暮らさなければならぬ。それをまさに横断的に切り開くわけですね。大学セミナー・ハウスの丘にくれば、そういう大学間の壁を取り除いて、皆が睦まじく、都合える。当たり前のようですが、日本の教育現場ではなかなか実現しなかったことです。それを先年近く前に発想したというのは驚異ですね。

絹川 飯田さんが我々学者と違う点は、やはり実行の人だということですね。

中嶋 そうです。飯田さんは学者ではなく、ICUの就職部長という大学の事務職員だったわけですね。

絹川 その前は東京女子大学の事務局長でした。中嶋 大学の事務職員でこういう発想を持ったというところに非常に意味があると思います。先日、大学セミナー・ハウスのSD (Staff Development) 大学職員研修プログラムを開発しました。大学では事務職員の識見が非常に重要なのです。飯田さんほどの識見を持った事務職員は少ないなと思います。

知のネットワーク

絹川 発想が時代を先取りしていたということでしょうね。あの当時の、教員中心の大学という時代の中で、スタッフの側からクリティカルに大学の状況を見て、それを何とか克服しようと大学セミナー・ハウスという発想にたどり着き、それを創ってしまっただけの実行力、これはやはりすごいと思いますね。しかも、この大学セミナー・ハウスの発想には、二面あります。一つは、大学の教員が学生と寝食を共にしながら学習をする「場」を提供する、すなわち宿泊施設を提供するという事業。もう一つは、最初からその当時の日本の大学の錚々たる先生方を中心に据えた「企画委員会」というものを作り、現在の「大学共同セミナー」などさまざまなセミナーの原点になるような催しを行ったことです。常に、その当時のエスタブリッシュメントとも言える、一級の知性の人にコンタクトを取って中心に据えたのです。私が館長就任をお受けした理由の一つは、大学セミナー・ハウスが築き上げてきた知のネットワークというも

のを崩してはならない、これを大事に守り育てなければならぬと感じたからです。その知のネットワークの原点が創立当時の「企画委員会」です。ですから、大学セミナー・ハウスには単に学生と教員の交流の場を用意する施設としての役割だけでなく、そのようなプログラムを用意するという重要な面があるわけです。

中嶋 そうですね。したがって、主催プログラムの企画というものが大学セミナー・ハウスでは今後一番重視されなければいけないと思います。

絹川 もう一つ、「企画委員会」にはいろいろな分野の先生方が集まりますから、おのずから学際的になってきます。今ではごく当たり前になっていますが、当時としては画期的であった学際的な問題意識を掘り起こしたという功績もありますね。当時のメンバーを見ると、委員長は手塚富雄東大教授。小谷正雄、朝永振一郎、永井道雄、松田智雄等、第一級の学者が入っています。村井資長、後に早稲田の総長になる人もいます。こういう一流の知性を集めて、その人たちがいろいろなプログラムを考えた。「企画委員会」は昭和41年にできて、5年後の昭和46年に「共同セミナー委員会」になります。それ以来共同セミナー委員会がずっと続くわけです。

時代を先取りするプログラム

中嶋 そういうものが原点になる一方、大学も随分変わりつつあるわけですから、これまでの遺産をどういうふうに進化させるかを考えなければなりません。継承すべきものと発展させるべきものとは何かということをしつかりと位置付けてゆかなければならないというところがこれからの問題ですね。このあいだ開催したSDプログラムにしても、大学教員懇談会にしても、これまでのFDプログラムにしても、北は北海道から南は九州まで、全国から非常に多くの参加者が来られます。これはやはりプログラムの内容がいいからですね。

絹川 時代の必要に応えるからでしょう。中嶋 今は当たり前になってしまいがち、大学審議会の答申に出たり、文部省の文章にも出たりするようになりまして、FDという言葉は、もともと大学教員懇談会から始まって独立したわけです。この大学セミナー・ハウスが発想の原点になったわけですね。同じように、SDプログラムもここが発想の原点で、おそらく大学間の壁を超えて今後発展していくのではないのでしょうか。今後そういう発展的なものをどんどん打ち出していくことが必要でしょうね。

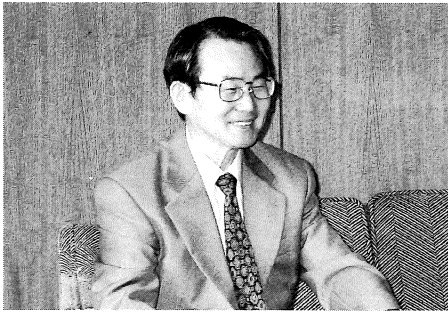
絹川 そうですね。大学セミナー・ハウスの発想自体が時代の先駆けでしたし、その中の一つ一つのプログラムが時代を先取りしてやっています。そういうことが大学セミナー・ハウスの先進性でしょうね。先ほど中嶋先生がおっしゃったように、どうやってこの営みを継承し、発展させていくか。やはり大学セミナー・ハウスが築いてきた知のネットワークが大切にされていなくて、そういう発想は出てこないわけです。それぞれの大学の先生方が個々の大学という枠を超えて一緒に考える場をここで持たされているということが一番大事なことです。大学セミナー・ハウスの運営の責任を担うものとしては、そういう場がうまく構成され、先生方が自由にそれぞれの発想をここで戦わせることができるような、そういう空間作りを心がけなければいけないと思います。

中嶋 いまおっしゃったように自由な発想でいろいろな人がここで意見を闘わせるのだということ、我々がしつかりと自覚していく必要があると思います。これまでもさまざまな意見が共存する場、そういう点がしつかり守られてきたからこそ、大学セミナー・ハウスは続いてきたのだと思います。

絹川 自由にそれぞれが発想すればお互いにクリティカルになりますから、事柄自体としてはやはり厳しいと思います。大学セミナー・ハウスはそういう厳しさを包含するところであるわけですね。

豊かな自然環境

中嶋 そうです。もう一つ、知のネットワークとともに、大学セミナー・ハウスというものが持つ環境は是非大切にしたいと思っています。東京の緑がだんだん少なくなって自然破壊が進んでいる中で、このような緑豊かな環境が保全されているということは素晴らしいことだと感じます。建物はいまだいぶ老朽化しているけれど、東京にもこんな緑の自然が残っている、これは大事にしたいですね。今も外に出ると、ヒグラシや、虫の音がうるさいくらい聞こえてきます。これが東京の中にあるということが大変なことなのです。先ほどおっしゃったように侃侃諤諤と議論をしても、この自然の中だと心が和むのではないのでしょうか。私国際プログラム委員会の委員長をしていた時、私生とある女子学生が対立してしまっていて、にっちもさっちもいなくなっていて困ったことがありました。ところが、その学生がピアノを弾けるといふことを知って、ピアノを弾いてもらい、最後に蛍



▲絹川正吉館長

の光を皆で合唱したのです。その時、ちょうど夕映えの富士山がきれいに見えて、何とも言えない感動があったのです。それはただのセミナーではなく、そういう対立があっただけに、皆感激してこの自然に包まれた大学セミナー・ハウスの丘を去っていった。そんな思い出があります。そこに自然が豊かな大学セミナー・ハウスが持っているもう一つの意味があると思います。動植物が本場に活かしているこの自然を大切にしたいと思えます。

建築様式の継承と改善

絹川 建設時の写真を見ると、木があまりありません。この自然も当初は今のようには豊かではなかったのですが、皆さんが記念植樹をされ、こまめに育て上げたわけですね。

中嶋 ユニット・ハウスや、楔型の本館など、この建築様式も当時としては非常にモダンで、早稲田大学の吉阪隆正先生を中心としてU研究室が設計されました。これもやはり、何とか保存できる場所は保存し、また同時に、新しい時代に合ったものを作っていかなければならないと思えます。

絹川 大学セミナー・ハウスの施設は当時の日本の経済状況下では、ずいぶん立派だったのです。今はあまり評判は良くないけれど、ユニット・ハウスもなかなか洒落たものでした。トイレなどは外にあつて、今の人は不便だと言うけれど、その頃は不便とは感じず、むしろ面白かったですね。朝起きて冬など寒い中、洗面所で顔を洗おうとしたらお湯が出るわけですよ。今はお湯など当たり前に出るけれど、当時は給湯するなどという発想は日本にはありませんでした。その時にお湯を出したのです。もう一つ驚くべきことは、便座にはじめからちゃんとウォーマーがついていたついでのことです。だから、Plain Living and High Thinkingという大学セミナー・ハウスの標語がありますけれど、一見Plain Livingでありながら、えらく変なところが贅沢だったんです(笑)。豊かな施設を作ったので、いわば侃侃諤諤の思想を言わせる。戦わせない豊かな環境に包まれて、戦ってみれば人間的な確執を残さないで、事柄を事柄として議論できるような空間ができていた。だからやはりある種の豊かさというものがこういう施設には必要なのでしょう。しかし、現在の大学セミナー・ハウスは、日本の生活水準から考えると、いろいろ利用者が不便をおかけして、ご不満が出ているわけですね。この建物全体が大学セ

ミナー・ハウスのある思想性を表現していますので、ユニット・ハウスなど老朽化している建物をどうするかということも難問題です。

中嶋 それは大事なことで、大学セミナー・ハウスは今の時代からするとそれほど人を引き付けないうちにも壊れかねない、やはり当時の発想を建物にも反映していただと思うのです。確かに全てをホテルのように集合住宅にしまえば楽なこととは事実で、いろいろ経営の合理化のためには必要かもしれないが、どこかモデルとしてユニット・ハウスを残しておきたいですね。本館も使っていくけれど、これには大地に知の根を打つというような意味があるのでしょうか。そういった意味を生かしていく必要がありますね。

絹川 そうですね。大学セミナー・ハウスのシンボルマークは、太い幹が一本あつて、それに七つの葉がついている。この七という数字に特別な思い入れがあるのでしょうか。七はギリシャの神秘思想の中では特別な数字です。ユニット・ハウスのそれぞれの群にセミナー室がついていて、教員と学生が一緒にここで生活をする。そのユニット・ハウスの群が七つある。その七つの根として本館が建っているわけですね。こういう思想表現を、どういふふうに変更して捉え直していくか。記念的にはいくつかのユニット・ハウスの群というのは残した方がいいと思います。

中嶋 今後どういふふうか、インベーションを行うか。その辺の工夫が必要ですね。

新しい試み——主催セミナーで単位互換も

中嶋 理事長というのは経営面で行っているお手伝いすることになるわけですが、やはり、できるだけ多くの人に使っていただくように、会員を増やしていく努力をしていきたいと思います。それとともに、例えば単位互換なども、やり方によっては面白いことができるはずですね。大学セミナー・ハウスを拠点とした、新しい大学のあり方を発想し、呼びかけていくことも必要ではないでしょうか。例えば、私はよく大学審議会などで言っているのですが、今情報ネットワークで多元的にマルチメディアをそろえていくこともいいけれど、やはり人と人との接合が必要ですね。放送大学でも、あの発想だけで大学を考えると、最後に大学はいらなくなる。教師と学生、学生同士、人と人としての触れ合いもいらないですね。そうなる、まさに大学は崩壊するわけですね。例えば、放送大学の学生たちは、放送大学の施設で授業も受けているけれども、大学セミナー・ハウス

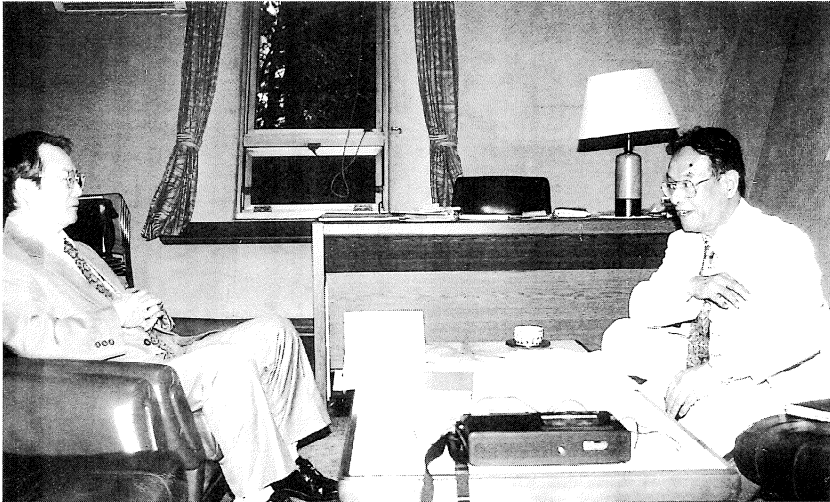
の丘にも来て一緒に宿泊しながら授業を受けるといいと思います。

今後、通信教育だ、やれマルチメディアの世界だということになってくればくるほど、人と人との触れ合いはここですることを条件にする、というようなことをいろいろプログラム化していく必要があると思います。単位互換は各大学間でこれからもっと進みますから、共通授業はここから大学セミナー・ハウスです。単位の認定権は少なうと各大学にありますし、さまざまな規制緩和などがあります。大学セミナー・ハウスの会員校同士で国際学生セミナーや共同セミナーを受講したら何単位になるというようなことを呼びかけていけば、各先生方はゼミを持っているわけですから、それぞれの大学でする授業がだいたいできます。細切れに二年間授業で聞いて単位にするよりも、少なくともここで2日、3日泊り込みで当該テーマを徹底的に議論したら、非常にインテンシブな学習になります。そんなことも将来的には考えていかなければならないと思えます。

絹川 単位については、ある一定量の学習がなければいけません。単発の共同セミナーだけでは問題が起こるので、例えば、ある共同セミナーを年3回同じテーマで通してやる。それをずっと続けて受講した学生に対して単位認定をするというふうなやり方で可能かもしれませんね。多才な先生方がそれぞれの大学から参加しているわけですから、ある共同セミナーをいくつかの大学が協力して運営し、それを受講した学生にはその大学が単位認定をするなど、方法はいろいろあると思えますね。

今こそ求められる「人的交流の場」

絹川 中嶋先生がおっしゃったように、情報化の時代、情報技術で非常に効率的に知識の伝達が行われますけれども、学習というのは本質的にはやはり人格的なものなのです。ですから、どんなにIT技術が発展しても、顔と顔を合わせて、ある知的な営みをするという事柄の本質的な意味が、失われることはなく、むしろITが強くなければ強くなるほど、どこかでやはりそういう基本的な知の営みというものが行われていないと、人間の知がゆがんでくると思えます。そういう意味で、ITが盛んになればなるほど、それを補完する意味で大学セミナー・ハウスの存在の意味が強くなっていくと思います。そういう大学セミナー・ハウスの機能を協力会員校だけでなく、多くの大学に改めて再認識していただく。協力会員校とい



うものは一緒に大学セミナー・ハウスを運営しようということできたわけですから、もう一度その原点を復活させて、新しい世紀における大学セミナー・ハウスの意味を明確にするような営みを創り出すべきだと思います。

中嶋 それには、プロジェクトを立ち上げて、具体的に研究して見る必要があるでしょう。やる気のある人が何人かでネットワークを組んでいけばできると思います。今は大学が自由な方向に進む時代ですし、国立大学もだんだんそういう方向にいかざるをえないでしょう。

絹川 とところで、大学セミナー・ハウスの創設の経緯を見ますと、建設費の大部分は三井銀行会長佐藤喜一郎氏を中心とした財界の支援によつていますが、一割は文部省が出しています。初代の理事長石館守三（東京大学名誉教授）と館長茅誠司

（東京大学前総長）の尽力もあったのでしようが、当初は文部省がそれだけ肩入れをしていたわけです。最近少し文部省との関係が薄いですね。FDに関しては協力会員校の協力を得て、文部省の予算をいただいているのですが、直接的に今おっしゃったようなプログラムに対しては文部省から援助していただいてもいいのではないかと思います。

中嶋 私もその点で必要な努力をしてみます。ところで、文部省も高等教育だけでなく、生涯学習のことをすいぶんやっていますし、大学セミナー・ハウスも今までと同じことをやっているだけではだんだん利用者が減ってくるかもしれないですね。活性化するためには、新しいターゲット、いい意味での経営戦略を考え直す必要があるわけです。それにはやはり、社会人や生涯学習、留学生のことも考えなければならぬと思います。

司会 一度大学を出ても、定年退職後に大学の勉強を直したいというような方や、学位を取っていないので取りたいという方がいらつしやるようですね。学位授与機構の機能も考慮に入れて、何か工夫できないものでしょうか。

絹川 さきほどお話しした共同セミナーを受講すれば単位になるという、単位認定がきつと行われるシステムができ、そこに社会人が来てそれを受講し、何単位取れたということがシステムとしてはつきりできるようにすれば、あとは学位授与機構でそれを認めるかどうかという問題ですね。今は大学の単位でない認められていません。だから、システムとして大学セミナー・ハウスの英語名である Inter-University がここでできないかということですね。生涯学習時代の大学セミナー・ハウスのファンクションをどういうふうにかかすかです。可能性があるわけですから、それをぜひ考えたいですね。

中嶋 今後経営の再建をし、この自然と知のネットワークの調和を活かすやり方を考えていきたいと思えます。できることは沢山あると思えます。それが全部できるかどうかは別としても、きちんと戦略を立ててやっていけば、かなりいろいろおもしろいことができるのではないかと思います。

支援の輪を広げよう

絹川 最後の問題はやはり、運営や経営、施設関係の問題ですね。

中嶋 どうしても施設の刷新は避けられませんので、常務理事会でしっかり原案を作っていただいで進めていきたいと思えます。

絹川 この大学セミナー・ハウスの運営の根幹は、一つは協力会員校です。もう一つは、規模は小さいけれども千人会です。基礎になる運営基盤はそれしかないから、それを安定させるために、サポーターをお願いできるグループのようなものを考えないといけませんね。ユニット・ハウスという思想を象徴的には維持しながら、しかし現在のユニット・ハウスは使用耐用年数を過ぎていますから、整備して時代に合った施設を用意しなければならぬわけです。そのためにはもう少しご支援いただく輪を広げないといけません。

中嶋 とりあえずは募金活動をきちんとやってみることにすね。

絹川 協力会員校であることの意味を積極的に考慮し、協力会員校がここを使わないと損だというようなアイデアがないかと思っています。いま文部省を中心に教養教育が盛んに謳われていますが、教養教育の本質というのは知識ではありません。教養というのは人間としての生き方ですから、具体的に教員と寝食を共にするというパーソナリティを介する接触の中から醸成されてくるものです。ですから、教養教育が本当に大事であれば、大学セミナー・ハウスを大切に、積極的に使う機運が出てくるべきでしょう。「大学の欠を大学セミナー・ハウスが補う」というふうに（笑）。

中嶋 大賛成です。ここが皆の共有財産だという意識が最近欠けていますね。会員校にはお金をいただくというだけではなく、かつてのように参加者意識を持っていただくような工夫が必要です。

絹川 大学セミナー・ハウスの存在自体、類似のものができてきたし、プログラムも学際的なものも始まったけれども、そういうものはある意味ではポピュラーになりすぎてワン・オブ・ゼムとして埋没してしまった感じがあります。ですから、大学セミナー・ハウスが個性をもつと発揮させて、もう一度再認識していただく必要があります。やはり広報活動に力を入れていくことが大事ですね。

中嶋 館長はまさに大学セミナー・ハウスの人格的な代表で、絹川先生という適任者を館長に得ましたから、是非これからごいっしょに発展に力を尽くしていきたいと思っております。

絹川 理事長のご支援を宜しくお願いいたします。

最後に失礼ですが、ここで前理事長・館長の佐野博敏先生（現大妻女子大学学長）に、心よりお礼を申しあげます。

司会 本日はありがとうございました。（終了）

第183回 大学共同セミナー
沖縄／アジア／日本

—高岩 仁 三部作—

「教えられなかった戦争」を観る・考える・語り合う

平成12年6月16日～18日

【講師】

映像文化協会

不戦兵士の会

関東学院大学教授

VAWW-NET Japan

NHKエンタープライズ21

【運営委員】

東京都立大学助教

アジア太平洋資料センター

【参加状況】

学生13校23、社会人15合計38名（男21、女17）

感銘与えた映画と講演

今回のセミナーは、高岩 仁監督の映画を観ることからスタートした。マレーシアを舞台とする日本の戦争拡大、フィリピンに対する軍事侵略と戦後の「開発」という名の侵略、戦後沖縄の基地反対闘争についての三本である。「映画は重いが目をそむけてはいけない」「戦争の原因は政治的な問題

より経済問題にあることを知った」驚きが参加者の胸をよぎった。また「ハルモにや大娘たちの人柄、優しさ、怒りに、涙が止まらなかった」感慨を呼び起こした池田恵理子先生の講演、戦争体験者の藤岡明義先生、関東学院大学の林博史先生、VAWW-NET Japanの金富子先生によって戦争の実態がさまざまな角度からあぶりだされた。映画や講演だけでなく、大学共同セミナーの伝統である、異なる大学、年代との交わりを得たことも参加者の収穫であり喜びとなったようだ。

学生には「自分の無知に気づく」きっかけとなり、社会人には「さび付いた心と頭のリフレッシュ」になり、密度の濃い内容のセミナーは、「明日からの自分の生活にどう反映させるか」を課題に閉会した。



▶池田恵理子先生

第1回「世界とアメリカ」セミナー

パクス・アメリカ

カーナの50年

平成12年6月30日7月～2日

【基調講演】

中央大学客員教授、アメリカ議会調査局研究員
リチャード・クローニン

【セクション演習講師】※印は運営委員兼務

聖心女子大学教授

東洋英和女学院大学教授

中央大学教授

大東文化大学教授

日本大学教授

拓殖大学海外事情研究所教授

東京外国語大学教授

静岡県立大学教授

明治学院大学教授

立教大学教授

【参加状況】

一六大学一二〇名、社会人一名合計一二一名

満足度高い内容

今回初のセミナーには運営委員の先生方の所属する7つの大学を中心に121名が参加

した。セミナーは「パクス・アメリカカーナの50年」と題したR・クローニン先生の基調講演と「米ソ冷戦と核問題」、「世界経済とアメリカ」、「日米関係と東アジア」、「米欧関係の諸相」、「アメリカの中東政策」をテーマにした分科会で構成された。

参加者は自身の専攻を深めるだけに留まらず、テーマに興味を抱き、新たな問題意識の構築を希望する人たちが目立った。セミナーに対する感想は「満足した」という回答が72%に達し、うち、「非常に満足した」という感想を5人に1人が抱いていた。

また大学セミナー・ハウスの基本理念である大学間の交流に期待して参加した人も半数にのぼり、セミナー成功の一因となった。

英語の基調講演では「通訳がほしい」「日本語訳文を」「理解できなかった」など、約半数の人たちが苦労したようだった。



▶リチャード・クローニン先生

平成12年度

第1回常務理事会

平成12年5月27日(土) / (財) 日本教育会館

【出席者】〈常務理事〉宇野重昭、絹川正吉、中嶋嶺雄、〈法人〉佐野博敏(理事長)、本江哲郎(専務理事)〈オブザーバー〉三宅 彰(評議員会議長)

●主な議事

第九七回理事会・第七七回評議員会の議題、理事長・館長の交代について

平成12年度

第2回常務理事会

平成12年7月7日(金) / アルカディア市ヶ谷

【出席者】〈常務理事〉小山宙丸、佐野博敏、〈法人〉中嶋嶺雄(理事長)、絹川正吉(館長)、本江哲郎(専務理事)〈オブザーバー〉三宅 彰(評議員会議長)

●主な議事

役員等の報酬及び費用弁償について、常務理事の補充について

平成12年度

第97回理事会

平成12年5月27日 / 日本教育会館

【出席者(順不同)】

〈理事〉佐野博敏、本江哲郎、宇野重昭、絹川正吉、中嶋嶺雄、中川秀恭、天城 勲

【委任状による者】

理事・監事13名

佐野理事長が議長となり、報告と協議が行われた。

◇報告

以下の事が報告された。

1. 故飯田名誉館長の追悼記念会については今秋開催予定だが、詳細は未定。
2. ゴルフ場賠償問題については、中山ピークゴルフ場に対し約二三〇万円を支払うことと示談による解決とすることになった。
3. 事務連絡会が去る5月11日に参加大学20校で行われた。今年協力会員校以外に3校が加わって映像を駆使してセミナー・ハウスの紹介が行われた。

◇協議事項

1. 役員人事

役員人事のうち、館長・理事長を兼務してきた佐野先生より、大妻女子大学の学長に就任したことに伴い辞任の意向が示され、承認された。後任に関しては過日常務理事会で善後策が話し合われ、その結果として本日理事長に中嶋嶺雄東京外国語大学学長、館長には絹川正吉国際基督教大学学長が提案され、承認された。(いずれも任期は6月1日より2年間)

理事、監事については次のように再任した。

〈理事〉(20名)

天城 勲、石 弘光、宇野重昭、大橋英五、岡野加徳留、荻上紘一、奥島孝康、神谷健一、小山宙丸、清成忠男、絹川正吉(館長)、齋藤英四郎、佐野博敏、佐野文一郎、鳥居泰彦、中川秀恭、内藤喜之、中嶋峰雄(理事長)、蓮實重彦、本江哲郎(専務理事)

〈監事〉(2名)

梶井 功、鈴木康司、

2. 平成11年度事業報告(案)、収支決算(案)

①協力会員校は平成11年度末現在59、準協力会員校は4であること。②各種委員会委員数は共同セミナー18、国際プログラム12、大学教員懇談会企画21、大学教員研修プログラム14、大学職員研修プログラム7などとなっていること。③職員の構成は四月以後正職員5名、嘱託4名、パート職員6名、宿直勤務者6名となっていること、事務組織を3課制から管理・業務、企画・経理の2課制にし経営態勢の圧縮を図っていることなどが報告された。④宿泊利用者数は三〇、三六〇人で、昨年度比約79%、一昨年度比75%の大幅減少となった。これらの特徴は決算面に反映している。⑤一般会計の特徴として、収入面では宿泊収入が予算額に対し、決算では一、七九〇万円の減少になり経営上の重要問題として指摘された。支出面では昨秋に突発的に発生した崖崩れ対策費や職員の退職に伴う退職金が決算額の赤字額二、〇四七万円の主要部分であることなどが報告された。監査については鈴木、梶井両監事の報告で適正であるとされた。

以上の人事報告議案はすべて承認された。

第77回評議員会

平成12年5月27日 / 日本教育会館

【出席者】

三宅 彰(議長)、秋山正幸、岡本靖正、川原栄峰、船本弘毅、松田藤四郎、柳井道夫、野田一雄(代理)

【委任状による者】

40名

◇報告、協議事項については理事会と同じ

◇評議員人事について

協力会員校の学長交替に伴う明治大学学長山田雄一、明治学院大学学長脇田良一、順天堂大学学長小川秀興、武蔵大学学長横倉 尚、東京経済大学学長村上勝彦、芝浦工業大学学長江崎玲於奈、電気通信大学学長梶谷 誠各氏の評議員新任と右記大学前学長の戸沢充則、大場建治、片山 仁、櫻井 毅、富塚文太郎、小口泰平、有山正孝各氏の評議員退任。

準協力会員校の学長交替に伴う東京都立短期大学学長石渡徳彌氏の新任と水上 忠氏の退任。

共同セミナー委員会委員長の交替に伴う伊藤正直氏の新任と宇波 彰氏の退任。大学教員懇談会企画委員会委員長の交替に伴う山本眞一氏の新任と平野健一郎氏の退任。

協力会員校新規加入に伴う女子美術大学学長小松弘光氏の新任。

協力会員校の退会に伴う東海大学理事長松前達郎氏、杏林大学学長長澤俊彦氏の退任および役職を退任した東京ガス株式会社会長渡邊 宏氏の退任。

◇選任された評議員

〈評議員〉(62名) (学識経験者) 三宅彰、川原栄峰、中村 哲、井早康正、宇佐美滋、田邊久夫、黒須隆一、○伊藤正直、○山本眞一、(会員校代表) 相磯秀夫、秋山正幸、阿部謹也、雨宮眞也、荒井 献、石井哲夫、○石渡徳彌、磯野可一、板垣 浩、ウイリアムス・カリー、○江崎玲於奈、大橋秀雄、岡本靖正、

○小川秀興、沖永莊一、小倉芳彦、○梶谷誠、加藤 寛、北原保雄、小谷 誠、○小松弘光、佐藤 保、佐藤東洋士、鈴木章夫、清水 司、志村尚子、高野邦彦、塚本哲也、出牛正芳、中川徹子、西川哲治、原島文雄、日江井榮二郎、半田正夫、兵藤 一、船本弘毅、堀川清司、本多健一、松田藤四郎、松本浩之、水島恵一、宮本美沙子、○村上勝彦、森陽、柳井道夫、山田雅子、○山田雄一、○横倉 尚、○脇田良一、(財界関係者) 岩佐凱実、大賀典雄、平岩外四、渡里杉一郎

平成12年度 事務連絡会報告

平成12年5月11日(木) 13時30分～17時30分

今年の事務連絡会では、大学セミナー・ハウスをよりご理解頂くために、講堂でプレゼンテーションソフトやビデオを使って映像や音響による大学セミナー・ハウスの紹介が行われたこと、協力会員校以外の大学・専門学校も参加されたことが特徴であった。全体協議では、大学セミナーハウスに対して、利用される方々からの施設や主催セミナーへのご要望、ご感想など多岐にわたるご意見をいただいた。

【出席の方々】(一九大学二名・敬称略)
有末隆夫(東京家政学院)、稲毛道男(東京

電機)、上原正夫(日本医学技術専門)、大園栄治(東京外国語)、川上ひめ子(国際基督教)、河村有希(和光)、北折剛彦(東京工科)、木村英照(駒澤)、黒沢定広(埼玉)、菅原稜(桜美林)、高橋初枝(成蹊)、田邊久夫(慶應義塾、常盤 晃(慶應義塾)、内藤幸江(女子美術)、西村敏雄(東京工科)、平岩弘邦(中央)、深田祐介(筑波)、御堂前信也(駒澤)、村山正栄(お茶の水女子)、守谷香代美(芝浦工業)、山下恭弘(立教)、山本英次(帝京)

教育プログラム委員会報告

▼第1回共同セミナー委員会
4月7日実施。参加10名。前年度実施報告、今後の企画につき協議。

▼第1回大学教員研修プログラム委員会
4月14日実施。参加2名。第20回企画につき協議。

▼第1回大学職員研修プログラム委員会
4月24日実施。参加6名。今年度企画につき協議。

▼第2回共同セミナー委員会
5月8日実施。参加16名。今後の企画につき協議。

▼第2回大学教員研修プログラム委員会
5月12日実施。参加10名。第20回企画、講師等につき協議。

平成11年度一般会計収支計算書

(平成10年4月1日～平成11年3月31日) (単位：円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
基本財産運用収入	6,245	管理費	82,106,782
会員校会費収入	59,700,000	人件費	46,477,432
事業収入	109,124,696	施設管理費	28,924,648
施設改修協力金収入	5,699,850	一般管理費	6,704,702
セミナー会費収入	10,153,912	事業費	136,578,807
補助金等収入	4,985,850	人件費	61,176,221
寄付金収入	391,198	一般事業費	57,460,703
雑収入	9,276,739	普通セミナー事業費	11,808,355
繰入金収入	9,000,000	学生指導セミナー事業費	3,638,233
		国際学生セミナー事業費	2,495,295
		固定資産取得費	8,450,632
		減価償却積立預金支出	25,000,000
当期収入合計(A)	208,338,490	当期支出合計(C)	252,136,221
前期繰越収支差額	67,436,076	当期収支差額(A)-(C)	-43,797,731
収入合計(B)	275,774,566	次期繰越収支差額(B)-(C)	23,638,345

(注) 消費税の処理は税抜き方式によっている。

平成11年度千人会会計収支計算書

(平成11年4月1日～平成12年3月31日) (単位：円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
会費収入	3,195,000	印刷製本費	13,230
雑収入	39,912	通信運搬費	565,530
		払込手数料	40,700
		繰入金支出	9,000,000
当期収入合計(A)	3,234,912	当期支出合計(C)	9,619,460
前期繰越収支差額	25,602,004	当期収支差額(A)-(C)	-6,384,548
収入合計(B)	28,836,916	次期繰越収支差額(B)-(C)	19,217,456

(注) 消費税の処理は税込み方式によっている。

寄贈図書

00年4月～6月

『これからの大学と大学運営』 大学基準協会殿
『大学論集三十、高等教育研究叢書五九、六』 広島大学殿
『大学の授業』 東信堂殿
『作文の論理 分かる文章の仕組み』 東信堂殿
『複雑系経済学とその周辺』 西村和雄殿

ホームページをご覧下さい

大学セミナー・ハウスでもインターネットのホームページを開設しております。主な内容は、ハウスの歩み、交通案内図、出版物、施設使用料、教育プログラムの開催予告などで、常に最新の情報をお届けする一方、ご意見やハウス主催のプログラムへの参加のお申し込みもいただけるようにいたしました。どうぞご覧下さい。

ホームページ：http://www.mesh.ne.jp/ush/
お問い合わせは企画・広報係まで

TEL：0426-7618532
FAX：0426-7610266
E-mail：ush-kikaku@mhbglobe.ne.jp

新入生合宿に参加して

●人里離れた山中での合宿は、クラスの絆を深めてくれました。そして、ユニット・ハウスで過した長い夜は、新たな友情の予感を確かなものとしてくれました。時間割のことや人間関係のことなど、大学入学に際して心に抱いていた不安も、八王子に置いておくことができました。この合宿の内容も、八王子という場所も、実施された時期も、全てが、計算されたすばらしい企画だったと思います。これからも、ぜひ続けていただきたいです。

(お茶の水女子大学理学部・羽田みず恵)

●セミナー出発前、不安と期待がぐるぐる私の体中を駆けめぐっていた。一人ぼつんとしているのは淋しい。友達を作りたいな、と。いよいよ待ちわびたおしゃべりタイムです。一人一人と出会ってみると、その人が浮かび上がり、その人をちよつぱり感じるようになりまし。また、先生や先輩方を囲んでのおしゃべりは、たくさん笑って楽しかった。素晴らしい仲間に出会え、今後の学生生活がたのしみです。

(お茶の水女子大学生活科学部・米田直枝)

●入学して間もない頃、オリエンテーションということで私はこの大学セミナー・ハウスに一泊しました。周りは知らない人だらけの中で、どんな合宿となるのだろうととても不安でしたが、私の不安とはうらはらに、数人の友達もできとても楽しい合宿となりました。この合宿のように、これからの四年間の大学生活も楽しく送れる気がしました。

(大妻女子大学社会学部・井上奈穂子)

●正直、最初は乗り気ではなかった。まだ人の顔と名前さえ一致しないのに、一泊のオリエンテ

ションをするなんて、と思っていた。しかし、結果的にこれはとても貴重で有意義な体験となった。独文学科の雰囲気をつかめたのはもちろん、早い時期から友人ができたのがよかった。他学部、他学科の人がうらやましがらう。この伝統はいつまでも我が独文学科に残っていてほしいな、と強く思った。

(中央大学文学部独文学専攻・松岡昌)

●まだ大学の生活に慣れず、毎日が不安だった私を安心させてくれたのが大学セミナー・ハウスのキャンプでした。グループ研修ではクラスメイトや先生方とたくさん話をし、相手の意外な一面を発見でき私自身のことも多くの人に知ってもらえる良い機会でした。セミナー・ハウスでの生活はトイレや水道が外にあることが不便でしたが、それがかえってそこに出るたび誰かに出見え、話すきっかけとなり良かった。また、緑が豊富にあるため澄んだ空気と自然を満喫することができました。

一泊二日の短い滞在だったけれど、私はたくさんの友達と出逢うことができ、楽しい思い出できました。それは大学の敷地内では味わうことのできない貴重な体験であり、これから始まるようにする充実した大学生活を予期させてくれるものでもありました。

(武蔵野女子大学英語・英米文学科・服部薫)

●今回の目的は履修ガイドランスでしたが、それ以外にも多くの内容が詰まっていた。合宿することによってうちとけ合い、お互いを知る良い機会になりました。また、学校では雲上人にさえ感じられる先生方も、研究の他に意外な一面も見せて下さいました。一夜明けると、朝の清々しさの助けもあって、新しい仲間との初めてのあいさつを自然に交わしていました。大学生活の明るいスタートです。

(東京都立大学応用化学科・小曾根文恵)

●まだ右も左もわからない、始まったばかりの短大生活のスタートは、このセミナー・ハウスのオリエンテーションとなりました。規制された集団生活に嫌悪感を感じる風潮がある中で、私はご多分に漏れず重い気持ちでの参加でした。それがオリエンテーションが進み、話し合うにつれ少しずつ趣が変わっていき、夜半には将来の話をする仲に変わっていった事は今後どんなにかプラスになると思います。この機会を与えて下さった学校や先生方、セミナー・ハウスに感謝したい気持ち一杯です。

(共栄学園短期大学英語学科・伊東美紀)

●入学した時、誰もが不安になる事。それは「友達が出来るか？」だと思。その不安を吹き飛ばしてくれたのがセミナーだった。最初は三人で行動していたのが、オリエンテーション二日目の夕食後、昼間描いたスケッチを見せながらの自己紹介や自分の部屋で語り合ううちに、多くの友達と仲良くなった。そして信頼関係を築くことが出来たと思う。夢に向かって歩む私達にとって、大切な一歩になったと思う。

(共栄学園短期大学住居学科・松雄香織)

●初めはあまり乗り気ではなかったセミナーだったが、ゲームなどで盛り上がりつついくうちに自然と友人ができ、その夜部屋に遊びに行くまでになった。時間を忘れて話をするうちに夜は更けてゆき、そこで一夜を明かすこととなった。その部屋は四人が寝るにはあまりにも小さかったが、それが逆に友情を深めることとなった。結局、セミナーのおかげで有意義な大学生活を手に入れることができ、本当に良かったと思う。

(東京工科大学電子工学科・竹内孝彰)

●フレッシュマンキャンプに参加して私はたくさんの方のお話は、予習や復習や授業などで毎日忙しいと嘆いてばかりいた私にはとても参考になった。そして活動の範囲を自ら広げているという事に挑戦して一日を有意義に生きていくという結論に至ることができた。また、クラスの人たちについてもよく知るいい機会となり、本当に参加してよかったと思う。

(津田塾大学英文学科・矢野有紀子)

平成11年4月～6月新入生オリエンテーション合宿実施状況

学校名・学科名	*は2泊	学生	教師	合計
●4月(27グループ)				
東京薬科大学(新入生歓迎キャンプ)*		262		262
中央大学・独文学専攻		75	9	84
中央大学・心理学研究室		67	2	69
共栄学園短期大学・住居・社会福祉学科		234	22	256
共栄学園短期大学・英語学科		43	15	58
東京都立大学・電気・電子情報工学科		80	10	90
大妻女子大学・社会生活情報学科		109	11	120
お茶の水女子大学・理・生活科学部		309	21	330
東京工芸大学・建築学科		131	20	151
東京学芸大学・幼稚園科		23	4	27
日本女子大学・社会福祉学科		93	14	107
東京都立短期大学・経営システム学科		95	14	109
東京コンピュータ専門学校		207	8	215
東京都立短期大学・経営情報学科		191	21	212
武蔵野女子大学・英語・英米文学科		269	12	281
中央大学・教育学研究室		48	7	55
大妻女子大学・児童学科		117	15	132
十文字学園女子短期大学・家政学科		132	10	142
東京都立大学・応用化学科		56	9	65
慶應義塾大学・国際センター(留学生)		59	8	67
東京工科大学・情報工学科		225	15	240
東京工科大学・情報通信工学科		124	16	140
東海大学・西洋史学専攻		65	7	72
東京工科大学・電子工学科		235	14	249
東京工科大学・機械制御工学科		214	14	228
埼玉大学・電気電子システム工学科		29	4	33
東京学芸大学・欧米研究教室		25	2	27
●5月(11グループ)				
東京会計法律学園*		228	11	239
津田塾大学・英文学科		277	14	291
東京学芸大学・生物学科		24	4	28
東京学芸大学・国際教育教室		17	5	22
白梅学園短期大学・保育科*		250	16	266
東京都立大学・機械工学科		34	8	42
武蔵野外語専門学校		13	6	19
職業能力開発総合大学校東京校		81	6	87
東京都立短期大学・文化国際学科		92	14	106
山野美容芸術短期大学		78	15	93
東京会計法律学園*		221	12	233
計38グループ(23校)	実人数	4,832	415	5,247
	延人数	5,874	457	6,331

利用状況

00年4月～6月
 *11回月2回利用
 日帰り利用はグループ数のみ
 (延べ人数には日帰りの利用者は含まず)

■4月(63グループ、延五、四三七人)

- 東洋英和女学院大学教授 平山正実
- 東京薬科大学新歓祭 中村幸安
- 明治大学講師 中村幸安
- 中央大学独文学専攻新入生オリエンテーション
- 中央大学心理学研究室新入生オリエンテーション
- 明治大学 川口短期大学森久ゼミナール
- 日本大学教授 後藤晴男
- 日本大学教授 小林 晃
- 青山学院大学教授 中澤 進一
- 埼玉大学教授 福岡 安則
- 東京都立大学電子情報工学科新入生ガイダンス
- 日本大学ケンブリッジ大学サマースクール事前研修 市村 隆哉
- 日本大学教授 浮田 静雄
- 工学院大学助教 浮田 静雄
- 大妻女子大学社会学部新入生オリエンテーション
- お茶の水女子大学理・生活科学部新入生ゼミナー
- 東京工芸大学建築学科新入生オリエンテーション
- 東京学芸大学幼稚園科新入生オリエンテーション
- 日本女子大学社会学部新入生オリエンテーション
- 東京都立短期大学経営システム学科新入生オリエンテーション
- 東京都立短期大学経営情報学科新入生オリエンテーション
- 中央大学教育学研究室新入生オリエンテーション

シヨ

大妻女子大学児童学科新入生オリエンテーション

シヨ

早稲田大学教授 小林 英夫

東京都立大学応用化学科新入生オリエンテーション

慶應義塾大学国際センター新入留学生オリエンテーション

専修大学教授 麻島 昭一

東京工科大学情報工学科フレッシユマンゼミナー

東京工科大学情報通信工学科フレッシユマンゼミナー

東京工科大学電子工学科フレッシユマンゼミナー

東京工科大学機械制御工学科フレッシユマンゼミナー

東京工科大学機械制御工学科フレッシユマンゼミナー

東京農工大学教授 秋山 三郎

埼玉大学電気電子システム工学科新入生ガイダンス

学習院大学教授 坂本孝治郎

青山学院大学教職員組合

東京農工大学教授 覧具 博義

東京学芸大学助教 加賀美雅弘

桜美林大学教授 柳原 敦夫

都留文科大学教授 三井須美子

文教大学教授 広内 哲夫

東京会計法律学園教職員研修*

共栄学園短期大学住居・社会福祉学科オリエンテーション

共栄学園短期大学英語学科・英語専攻・秘書専攻・オリエンテーション

東京コンピュータ専門学校新入生オリエンテーション

武蔵野女子大学英語・英米文学科新入生オリエンテーション

十文字学園女子短期大学家政学専攻生活学専攻ゼミナー

東海大学西洋史学専攻新入生研修会

杏林大学教授 熊谷 文枝

神奈川大学助教 堀野 定雄

現代と経済

現代経営学研究会

東京YMCA西東京センター

オリエント貿易

日立超L S Iシステムズ

多摩中央信用金庫

混声合唱団うたの森

自費出版ネットワーク

多摩経済研究会

(個人利用)

V研究会

(日帰り利用)

茶道研究会*

第4回ワインアカデミー

■5月(62グループ、延四、〇〇六人)

駒澤大学教授 竹内 啓一

東京学芸大学助教 大河原美以

早稲田政経マガジン編集会

早稲田大学白門会

早稲田大学シミュレーションゲーム研究会

学習院大学シェイクスピア・ドラマ・ソサエティ

立教大学教授 正田 康行

芝浦工業大学電子計算機研究会

早稲田大学臨床心理サークルCLIPS

津田塾大学英文文学科新入生オリエンテーション

東京学芸大学生物学科新入生オリエンテーション

シヨ

東京都立大学教授 奥村 哲

早稲田大学環境ロドリゲス

上智大学手話サークルでのひら

アイセック中央大学委員会

中央大学教授 中川洋一郎

中央大学国際関係研究会

東京学芸大学国際教育教室新入生合宿研修

東京都立大学機械工学科新入生ガイダンス

横浜国立大学教授 渡辺 正義

一橋大学助教 関 直彦

武蔵工業大学教職課程

東京都立短期大学文化国際学科新入生オリエンテーション

順天堂大学M2クラスセミナー

明治大学教授 古賀 正則

成蹊大学50周年記念誌編纂委員会

日本大学雄弁会

中央大学カールトン大学短期留事前合宿

中央大学教授 高窪 利一

東京薬科大学生活協同組合

拓殖大学教授 中島 裕昭

拓殖大学長期留学プログラム合宿

東京会計法律学園就職セミナー*

帝京科学大学助教 小川 家資

白梅学園短期大学新入生オリエンテーション

武蔵野外語専門学校新入生オリエンテーション

職業能力開発総合大学校東京校新入生ガイダンス

山野美容芸術短期大学新入生ゼミ合宿

淑徳大学教授 野田 陽子

全日本学生吹奏楽連盟

東洋ローア・キリスト伝道教会

ブルーベル・ソサエティ

クリエイティブ・アート実行委員会

ポークアウト東京連盟練馬一七団カブ隊

ECPAT/ストッブ子ども買春の会

CSG

基準点測量自主研修会

NEC府中吹奏楽団

ベルモント化粧品

ころくや

小松ゼノア

多摩炭焼きの会

ソフトウエーブ

(個人利用)

V研究会 吉本 昌司

恵泉女学院大学 川島 堅二

平成一二年協力会員校事務連絡会
茶道研究会

一里庵

- 6月(33グループ、延一、七八四人)
- 東京都立大学教授 南雲 智
 - 電気通信大学教授 弓場 敏嗣
 - 立教大学教授 上田 信
 - 東京学芸大学講師 腰越 滋
 - 立教大学教授 栗原 彬
 - 早稲田大学教授 島田 征夫
 - 法政大学教授 陣内 秀信
 - 東京外国語大学助教授 成田 節
 - 東京理科大学教授 志水 英樹
 - 中央大学教授 桐山 昇
 - 芝浦工業大学教授 曾根 幸一
 - 国際基督教大学講師 篠原 和子
 - 学習院大学教授 江沢 洋
 - 東京大学アイステア オリエンテーション合宿
 - 成蹊大学国際交流センター北京短期留学
 - 東京大学助教授 寺田 実
 - 杏林大学第九回フォローアップ研修 小浪 充
 - 秀明大学教授 小浪 充
 - 金沢学院大学附属金沢東高等学校
 - 日本女子大学附属高等学校
 - 光合成細菌研究会
 - 第183回大学共同セミナー
 - アジア法学生協会
 - 第28回十大学合同セミナー
 - 第21回日豪合同セミナー
 - ルソール合奏団
 - ヒューマンライフセンター
 - ワセリ合奏研究会
 - たま女声コーラス
 - 日本分光
 - 〈個人利用〉
 - V研究会 吉本 昌司
 - 〈日帰り利用〉
 - 第5回ワインアカデミー
 - 茶道研究会

セミナー・ハウス

2000年4・5・6月分(年4回)
第159号
定価:200円

発行=財団法人 大学セミナー・ハウス
〒192-0372 東京都八王子市下柚木1987-1
TEL 0426-76-8511 FAX 0426-76-1220
振替口座 00150-1-74590

発行人=網川 正吉
編集=大学セミナー・ハウス企画・広報係
制作=中山企画

SEMINAR HOUSE
The Quarterly Journal of Inter-University Seminar House
No.159 (April-June, 2000)

今後の主催プログラム開催予定

■大学共同セミナー・大学院共同セミナー

回数	期間	主題	講師
第184回	10月27日~28日 (1泊2日)	平和の文化の担い手になろう —戦争と暴力の世紀を越えるために—	目加田説子、小林正典、奥本京子、 都留 康子、杉田 明宏

■国際学生セミナー

第27回	11月17日~19日 (2泊3日)	グローバルセッションの光と影	斉藤健、山田敦、関場 誓子 滝田賢治、勝俣誠、大芝亮 山本吉宣、渡辺啓貴、奥田和彦 他
------	----------------------	----------------	---

■大学教員研修(FD)プログラム

第20回	9月16~17日 (1泊2日)	授業が変われば〇〇が変わる —授業技術の解剖学—	山中速人、安岡高志、徳高平蔵 カワン・スタント
第21回	1月13~14日 (1泊2日)	(未定)	(未定)

■フィールドワーク体験セミナー

第2回	10/10、10/24、11/7、11/21日、12/5、12/19、1/9、1/23(いずれも火曜日) *ツアーは2001年3/6~3/12(5泊7日)ロンドン、ストラドフォード。 ライブトークのみの出席も可ですが、ライブトークはツアーの事前研修です。	シェイクスピアの旅 —連続ライブトークと観劇ツアー—	本橋哲也
-----	---	-------------------------------	------

※詳細が決定期ご案内させていただきます。

お問い合わせ・お申し込みは企画・広報係まで

TEL...0426-76-8532

FAX...0426-76-0266

E-mail...iush-kikaku@mub.biglobe.ne.jp

URL http://www.mesh.ne.jp/iush/

*お詫びと訂正

前号(158号)の記事「故 飯田宗一郎名誉館長を偲ぶ」の「故 飯田宗一郎名誉館長略歴」で「1999年1月26日逝去」と記されておりましたが「2000年1月26日逝去」の誤りでした。ここに謹んでお詫びと訂正を申し上げます。

●●館長室から●●

本年7月で大学セミナー・ハウスは開館35周年を迎えた。それに先立つように、創設者の飯田宗一郎氏が、1月に天に召された。

大学セミナー・ハウスの現在の職員で、飯田氏を直接知っている人は少なくなつた。大学セミナー・ハウスの創設の経緯を飯田氏が記録した「大学を開く」を、ある職員が読んで、「自分の勤務する大学セミナー・ハウスが、当時の社会の中核を占める大変な人々から支援されて創られたことを知り、ほんとうに感激した。大学セミナー・ハウスができたことは、ただ事ではなかつたのですね」と感想をいつてくれた。

一人の人の願いが現実に実現するためには、その人の使命感・熱意とともに、発意の内容が、人々の共感を得られる卓越性を備えていなければならない。飯田氏の発意は、そういう条件を備えた先見のなものであつたから、大学セミナー・ハウスは実現したのである。しかし、よい事業だから必ず成功するとは限らない。創業者には、人に言えない苦行があつたに違いない。かすかにそれを暗示するような記述が、「大学を開く」にかいま見える。

飯田氏は、大学セミナー・ハウス創設の事業に乗り出す直前は、創設間もない国際基督教大学の就職部長という幹部職員であつた。それを辞職して、水の上にパンを投げるような事業を始められた。ご家族に不安感がなかつたはずはない。いま、大学セミナー・ハウスの経営は、容易ではない。館長室のかつて飯田氏が座つた椅子に身をおいてみて、創業者の意志を無にしてはならないと切に思う日々である。

表紙の写真はドラム缶窯で焼いた竹炭を窯出しする「多摩炭やきの会」の皆さんとそれを講評する「国際炭やき協力会」の杉浦銀治さん(写真左端・千人会員)——キャプションファイヤー場にて